

間もなく来日!

セミヨン・ビシュコフ 指揮 チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

音楽ジャーナリスト中村真人氏が来日ツアーについて、音楽監督セミヨン・ビシュコフに尋ねました。



チェコ・フィル音楽監督 セミヨン・ビシュコフ

2018年にチェコ・フィルの首席指揮者に就任されてから7年、この間の成果と、チェコ・フィルという特別なオーケストラへの思いを聞かせてください。

7シーズン目が終わりに近づいた今、私たちの共同作業が大きな発展を遂げてきたと感じています。今シーズン、アメリカツアーではチェコ音楽を、ヨーロッパツアーでは、モーツァルト、マーラー、ショスタコーヴィチを披露しました。聴衆たちが見せた反応は、チェコ・フィルが今や世界の一流オーケストラの中でもトップクラスに位置しているという確信です。チェコ・フィルと私にとって今最も重要なことは、この楽団のDNAに刻み込まれたチェコ音楽の解釈が認められるだけでなく、国際的なレパートリーにおいてもいかに説得力のある演奏をできるか、ということ。これが実現していることに、私は満ち足りた気持ちです。

来日公演のプログラムも、チェコ音楽に留まらない多彩な内容ですね。まず、没後50年のショスタコーヴィチの交響曲第8番という大作が目を引きました。

この曲は第二次世界大戦中の1943年に作曲されました。当時、戦争の行方は不透明で、どちらにも転ぶ可能性がありました。今ウクライナで起こっていることを考えると、まさに現代の人々が再び経験している状況といえます。戦争の最中にショスタコーヴィチはある意味で生き残るための闘いを描き、最後に光と希望を込めた。それがこの曲のメッセージだと私は思います。政治的な楽曲とは考えていません。人生そのものを反映した曲です。ショスタコーヴィチが生き、彼の世代が生き、私たちが今生きている人生そのもののなのです。

もうひとつのメインプログラムは、チャイコフスキーの交響曲第5番です。

チャイコフスキーの音楽は、非常に自伝的です。彼が感じたこと、経験したことが作品に反映されています。それは夢であり、結局のところ闘いなのです。チャイコフスキーの交響曲は、第4番も第5番も運命の主題が始まり、その主題が何度も繰り返されます。実際、チャイコフスキーは運命の力というものを信じていたのではないかと思います。この第5交響曲は、巨大な傑作と言えるでしょう。

今回の日本公演では2人のソリストと共演されますね。ピアニストのチョ・ソンジンと、チェリストのアナスタシア・コベキナです。



ビシュコフ(左)とチョ・ソンジン(右)

チョ・ソンジンとは、私が委嘱したフランスの作曲家、ティエリー・エスケシュのピアノ協奏曲で二度共演しました。技術的に非常に難しい曲で、彼にとっても極めてチャレンジングな体験だったと思いますが、この作品にいのちを吹き込むため献身的に努力する様には心打たれました。日本で共演するのは彼の十八番ともいえるラヴェルの協奏曲ですから、今から楽しみです。

アナスタシア・コベキナはロシア出身で、現在はドイツ在住のチェリストです。つい先日、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団とハイドンの協奏曲を共演しました。注目すべき才能のチェロ奏者であり、彼女が楽器を奏で始めると、音楽そのものになり、とても感動的です。

最後に、日本の聴衆へメッセージをお願いします。

再び日本に行くことが待ちきれません。そして日本を離れるときは、いつも次の訪問が待ちきれなくなります。

インタビューの全文はこちらから



今こそ聴きたい! チェコ・フィル&ビシュコフ

文：ひのまどか（音楽作家）

創立130周年の歴史を誇るチェコ・フィルハーモニー管弦楽団は、言うまでもなく世界最高のオーケストラの1つであり、伝統を受け継ぐその芳醇な響きは世界中で愛されている。

では、オーケストラの伝統的な響きは、どうやって作られるのだろうか？ チェコの大作曲家たちの音楽とその精神を楽団員全員が受け継いでいることは勿論だが、チェコ・フィルは自国の音楽だけではなく、どの国の作品を演奏しても、豊かで温かく聴き手の心を包むような独特の響きを失わない。それは彼らが代々厳格に守ってきた音色や奏法を全パートが習得し、それをまた次世代に伝えてきたからだ。そこから生まれる見事な音響は、全員がソリスト級の名手揃いだ



絶頂期を迎えるビシュコフ & チェコ・フィル

からこそ可能なのである。

名指揮者で、音楽監督就任7年目に当たるセミヨン・ビシュコフに率いられての今回の来日は、2年前のオール・ドヴォルザーク作品でチェコ音楽を堪能させてくれたのとは異なり、4人の作曲家の大曲を配してそれぞれの魅力を紹介してくれる。これも、ヨーロッパの名だたるオーケストラや歌劇場のシェフを何十年も歴任してきた、経験豊富なビシュコフだからこそそのプログラムだろう。我々はチェコ・フィルとビシュコフが繰り広げる4つの音楽世界、4つの響き、4つの魅力を存分に楽しむことができる。

まず、チェコの新星で「天性のチェリスト」と称えられるアナスタシア・コベキナをソリストに迎えての、ドヴォルザークの《チェロ協奏曲》。ボヘミアの大自然への愛と郷愁を切々と歌い上げるこの名曲中の名曲を、ビシュコフもオーケストラもチェロの魅力を最大限引き出しながら、胸に染み入る響きで我々の心を熱くするに違いない。

チャイコフスキーの《交響曲第5番》は、「運命の主題」に貫かれた作曲家の自伝的作品。1852年レニングラード（現・サンクトペテルブルク）で生まれ、23歳まで旧ソ連で学び暮らしたビシュコフにとって、チャイコフスキーは子供の頃から馴染んできた作曲家だろう。すでにチェコ・フィルともチャイコフスキーの交響曲全曲録音を終え、最高の評価を得ている。チャイコフスキーの魂が生んだ音楽を、チェコ・フィルの重厚なサウンドで哀しく激しく奏でるだろう。今年2025年は、ラヴェルの生誕

150年、シヨスタコーヴィチの没後50年に当たることから、フランスとソビエトの作品も選ばれている。

ラヴェルの《ピアノ協奏曲》では、2015年のシヨパン国際コンクール優勝以来、飛ぶ鳥を落とす勢いで国際的な活躍を繰り広げるチョ・ソンジン（まだ31歳！）がソリストを務める。パリ音楽院でも学び、ラヴェルのピアノ作品全曲録音も果たしたチョ・ソンジンの「ラヴェルに寄せる愛」は有名。ビシュコフも1989、1998年までパリ管弦楽団の音楽監督を務め、フランス音楽にも精通している。流麗かつ洒落なラヴェルの音の祭典を、ぜひお楽しみいただきたい。

今回大きな話題となっているのが、シヨスタコーヴィチの《交響曲第8番》だ。独ソ戦（第二次世界大戦）の最激戦地、スターリングラード攻防戦の犠牲者に捧げる作品として1943年に書かれ、作曲家自身「自分の最高傑作」と称したこの超大作は、戦争の残酷さや虚しさを隠さず音楽に吐露しているが故に、スターリン政権は演奏禁止にした。レニングラード生まれのビシュコフにとって、独ソ戦は両親の世代の大惨事になる。「この交響曲はいま、現代の人々が経験しているのと同じ状況を語っています」と警鐘を鳴らすビシュコフの作品への思いを、チェコ・フィルは全身で受け止め、総力を結集した熱演を繰り広げるだろう。

正にチェコ・フィルの魅力全開の、今回の来日公演である。

ビシュコフ & チェコ・フィルの演奏動画はこちら



セミヨン・ビシュコフ指揮 チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

2025年10月22日(水) 19:00開演 サントリーホール

ラヴェル：ピアノ協奏曲 ト長調 M.83 (チョ・ソンジン出演)

シヨスタコーヴィチ：交響曲 第8番 ハ短調 Op.65

2025年10月23日(木) 19:00開演 サントリーホール

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 口短調 Op.104 (アナスタシア・コベキナ出演)

チャイコフスキー：交響曲 第5番 ホ短調 Op.64

主催：ジャパン・アーツ

特別協賛：三井住友海上プライマリー生命

後援：チェコ共和国大使館

S席 ¥25,000 A席 ¥21,000 B席・C席・D席 売切 [税込]

お申込み／お問合せ：ジャパン・アーツぴあ 0570-00-1212 www.japanarts.co.jp

